

今♡ご主人様大好きの
ドスケベエロ魔法つかいって
いいました!?



R18
ADULT ONLY
成人向け作品につき
18歳未満閲覧禁止



うんこの後
彼とお昼食べに
行こうと思って

リコも一緒に
どうかな？

いいわよ私は
二人のデートの
邪魔になるでしょ

もうそういうの
気にしなくて
いいよ♡
行こうね♡

分かった…
っていうか
みらい服くらい
着なさい

家の中でも
だらしないわ

はぁ♡
あ♡
モニ

ドロ♡

相変わらず
固いなあ
リコは♡

もう一発してから
いこう

うん♡

はーちゃんの
友達で
私の初めての
彼氏♡エッチも
上手で本当に
カッコイイ
大好き♡

ほっ♡
しゅき♡

僕もだよ♡

ハッ♡

ハッ♡

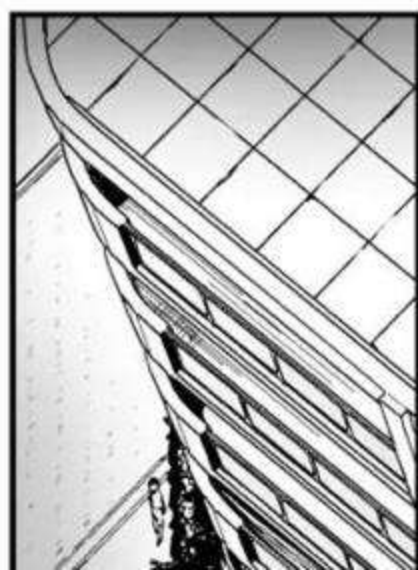
ハッ♡













キュアアップ
ラバパ♡

服よ
ぬげなさい♡

言っておくけど
みらいとのあれ♡
丸聞こえ
だったから

やっぱり?

ええ おかげで
あの後からずっと
ムラムラ
しっぱなしよ♡

パンツも
びしょびしょ♡

スイ♡
スイ♡



二人が戻ってくる
までに何発
できるかな?

分からないけど
ギリギリまで
やりましょう♡

ムシ♡



浮気
セックス♡

このデカちんで
いつもみたい
に私のエロまんこ
パコリまくって♡

ハッ♡
ハッ♡
ハッ♡





あれ以来みらいに
隠れてこうして
ハメまくってる♡

今日私と
会う前に
何発ひらの？

うま♡

ガッ

ズロロロ♡

10発かな

罪悪感
もちろん
スゴイけど...

じゃあ一昨日
私ろは11発らし
私の勝ひかひら♡

それ以上に
この素敵な彼が
私を求めてくれてる

だすよりコ
ロあけて

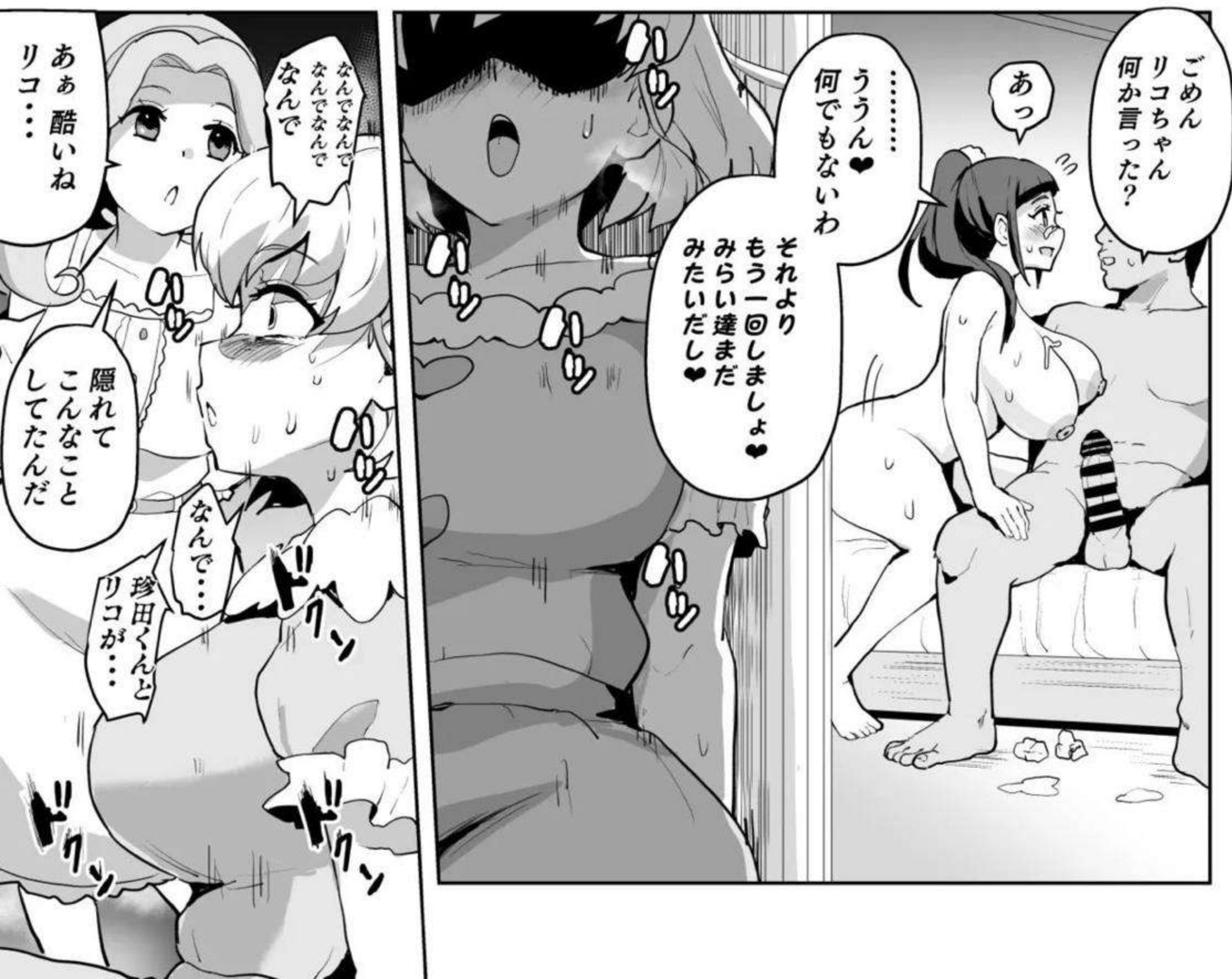
彼をみらいから
寝取っているという
背徳感と優越感♡

あー♡

最低だからこそ
最高に
気持ちいいのお♡

ト

イッ♡
ガイッ♡
グッ♡



でもリコも
きつと理由が
あって...

そうかな？

でも
そうだと
しても
泥棒は
泥棒
だよ

ど泥棒...
リコが？

うん♡そうでしょ
みらいが彼のこと
凄く大事にしているの
知ってるのに

彼素敵だから
奪おうとしてるんだよ

本当に最低の
牝ブタ泥棒猫...

!!

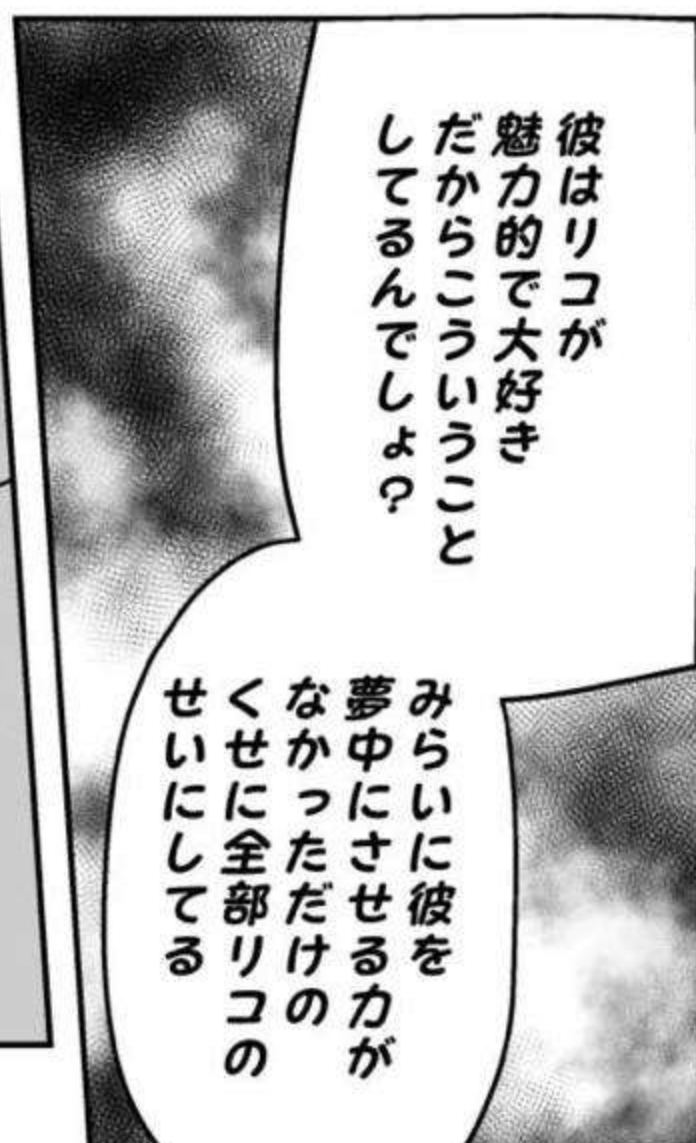
中々アツ
ラババ

みらいは
そんなの絶対
許せないよ...

ねっ♡

えっ

みらい...





ぽろぽろ



そうやって大声
だしておけば
私が黙ると
思ってるわけ

品のない女…

はあっ!?



ええ

いい歳して
ヌイグルミ連れ
歩いたり

魔法学校の
制服ではしゃぐ
痛い女は彼に
似合わないって
言ってるの



ゆ…
ゆるさないっ
から

あんななんか
死ねばいいんだよ



大体自分のテクが
ないから
彼を寝取られたん
でしょ?

それを
私のせいとかW
笑えるし
自分のせいじゃない

今テクなしって
いいました!!

いつ



それはこっちの
セリフよっ

テクなし
バカ女

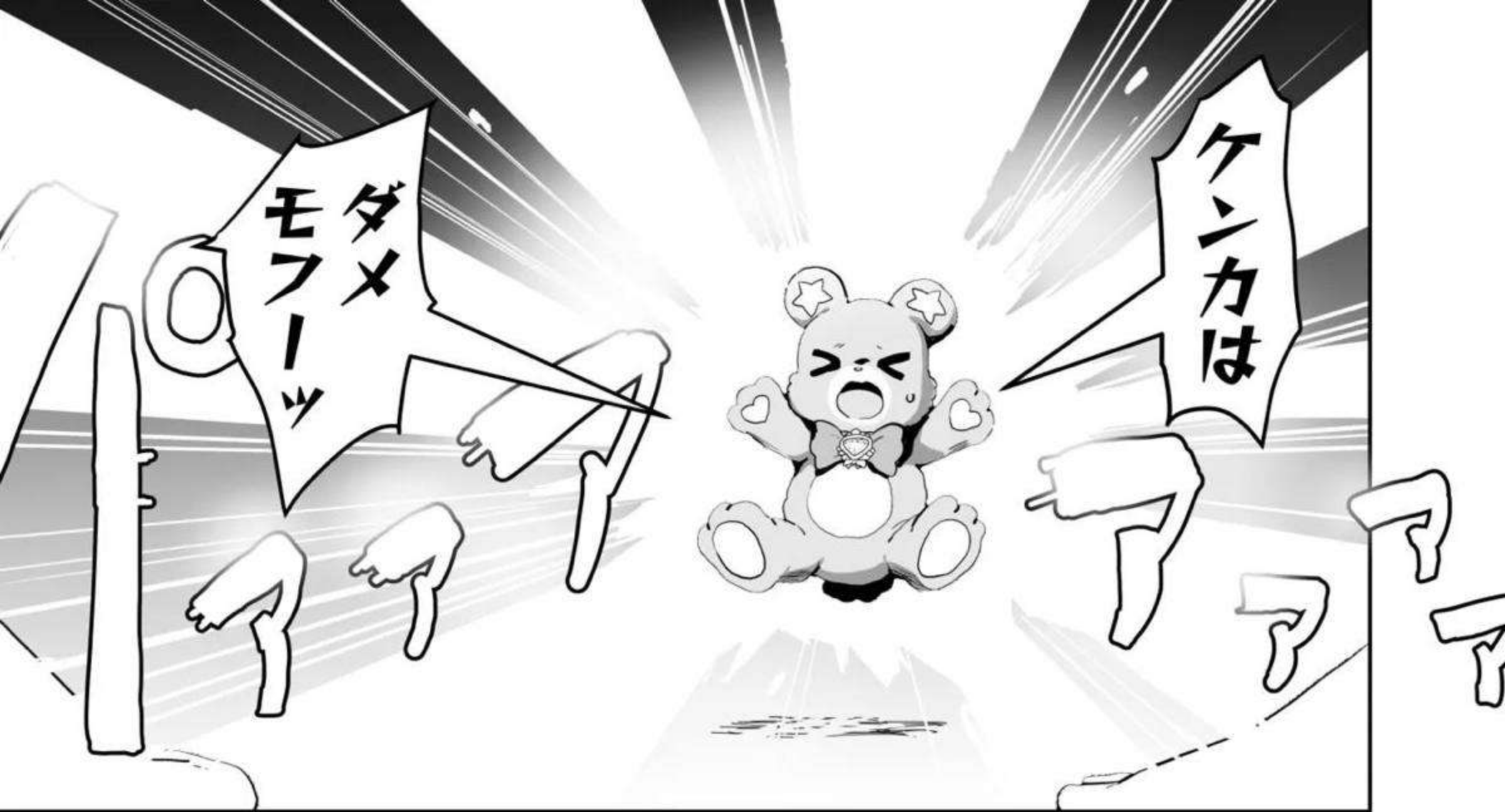
そまる
そまる♡
もう少し…

その黒い衝動が
プリキュアを新しい
ステージに
導いてくれるから♡

黙ってよ
クソビッチ

淫乱ブタ女

だ…
だめ
モフ





遙か昔のデウスマスと
マザーラパーパの戦い

大樹と大地は
分かれた
魔法界とナシマホウ界
となった

これは
知っているかと
思います

ですが実は
分かれたものは
もう一つあったのです

それは長い時を
かけて少しずつ形を
作っていきます

やがて生まれたのが
ここ……

エロ魔法界♡

分かれた
ものは
何だったのかですか？

それはラパーパの
持つ心の欠片

強い性欲淫欲
嫉妬や憎悪
負の感情

再び訪れる
デウスマスとの
戦いで利用されることを
危惧したのかも
しれませんね

話を戻しましょう
このエロ魔法界に
選ばれた人こそ
ご主人様です♡

圧倒的性欲と
絶倫ちゃんぽ♡

エロ魔法界が
待ち臨んだ

自身に
満ちるエロ魔法の
力を行使できる
存在♡

ご主人様は
計画の始めに
エロ魔法の力を
ラパーパを継ぐ
私に与えました♡

へへえ
小さくなった

じゃあここからは
僕のちゃんぽで
直接♪

何なの
れすう♡
こりええ♡

ふふ♡元はラパーパの力♡
それはもう
最高の気分でした……♡

なくしたものが返って
くる感覚……♡
頭がスケベで溢れる
あの感じ……♡

ほ♡

お♡

ほ♡

ん♡
ほ♡

ご主人様の
エロ魔法ちゃんぽで
まんこをつかれ
ほじられて
ビューされて♡

教えたでしょ
ピースしながら

おはははは

ピース♡
イグッ♡

イクほどに体が黒く黒く
ドスケベな力に
馴染んでいくのです♡

ぐるん

特濃ちゃんぽ
ザーメンひゃま♡

そして全てを
ご主人様で
塗りつぶされて
ようやく気づきました

好き♡

私の使命は
世界を見守ること
などではない…♡

ご主人様
ひんぽお♡

この方のブタとして
皆を真の幸せに
導くことなのだ…♡

ブヒ♡



マジカルに
ちんぽよ
生えなさい♡

最初はこれで
充分でしょう♡

ちひ
んん
ほほ
お？
♡

まずは一発
又キ又キ
してあげます♡

ハッ

ハ



ほ

「なんがえん♡」

せーちゃん いっしょ
せーちゃん いっしょ



どうです？
エロ魔法を使えば
ちんぽを生やすの
だって自由自在♡

はへ♡
フェリーチエえ
正気に戻ってえ…

ふふこのまま
エロ魔法に
身をゆだねて
マジカル♡

正気
でよ♡



ほっ♡

まんこあ♡

中はもっと
気持ちいいですよ
マジカル♡

キュアちんぽハメて
エロ魔法に染まり
ご主人様のものに
なりましょう♡

ハメたい
セックス♡

まんこに
ちんぽ♡

まんこに
射精っ♡

まんこ
おち犯したい♡

でできなひわ
私は伝説の
魔法使い
ブリキユアなによ

どんなにまんこの
中がエロくて
気持ちよくへもあ♡



仕方ありません
それでは
先っぽだけは
どうでしょう？

んぽ♡

しゃきっぱ？

はいちんぼの
先っぽだけ♡

大丈夫
先だけなら
セーフですから

マジカル
だめっ

お願いします
ちよっとだけでも
ハメてください♡

も…もう
お尻振って
フェリーチェは
おねだり上手
なんだからあ♡

分かったわ♡
でも本当に
先の先だけよ
すぐ抜くから♡

ふふ
はい♡

って先っぽだけれ
我慢できる
わけないでしょ♡

このエロまんこ
妖精つつ

フンっ♡
まんこ

やっべ♡

こんなスケベで
エロエロなまんこで
大人を惑わして

許さないからっ♡
フェリーチェ♡

フン♡

んふ♡

おしおきよ♡
私のキュア精子で
孕ますから♡

イケイケ

フン♡でるでる
でる♡♡

マジカルは
もうダメ
だろうね

おほっ♡ちんぽイグ♡
イケっ♡キュア
ちんぽ汁♡

………っ
そんなこと

……ごめんね
騙していて

でも僕がみらい
ミラクルのこと
好きなのは
本当だよ

やめて

私の彼への
気持ちは
作りものだった

その魔法だって
解けたはず
なのに……

なんでこんな

ドキ

ドキドキ

ドキ

ぼ……

僕には
ミラクルが
必要なんだ

そして
ミラクルも僕を
必要としてる

フッ

これから
僕たちが
築く未来を
少しみせて
あげるから

早く本当の
自分に気づいて

クニ

ド

エロップ
ラパパ

!!

イクイクイク
ちんぽミルク♡

ちんぽ

下のお口で
ごくごく飲んで
イクにゃん♡

ザー汁
きたあ♡

んっ♡

あっ♡みらい
ずるいわ

はー♡

パン♡

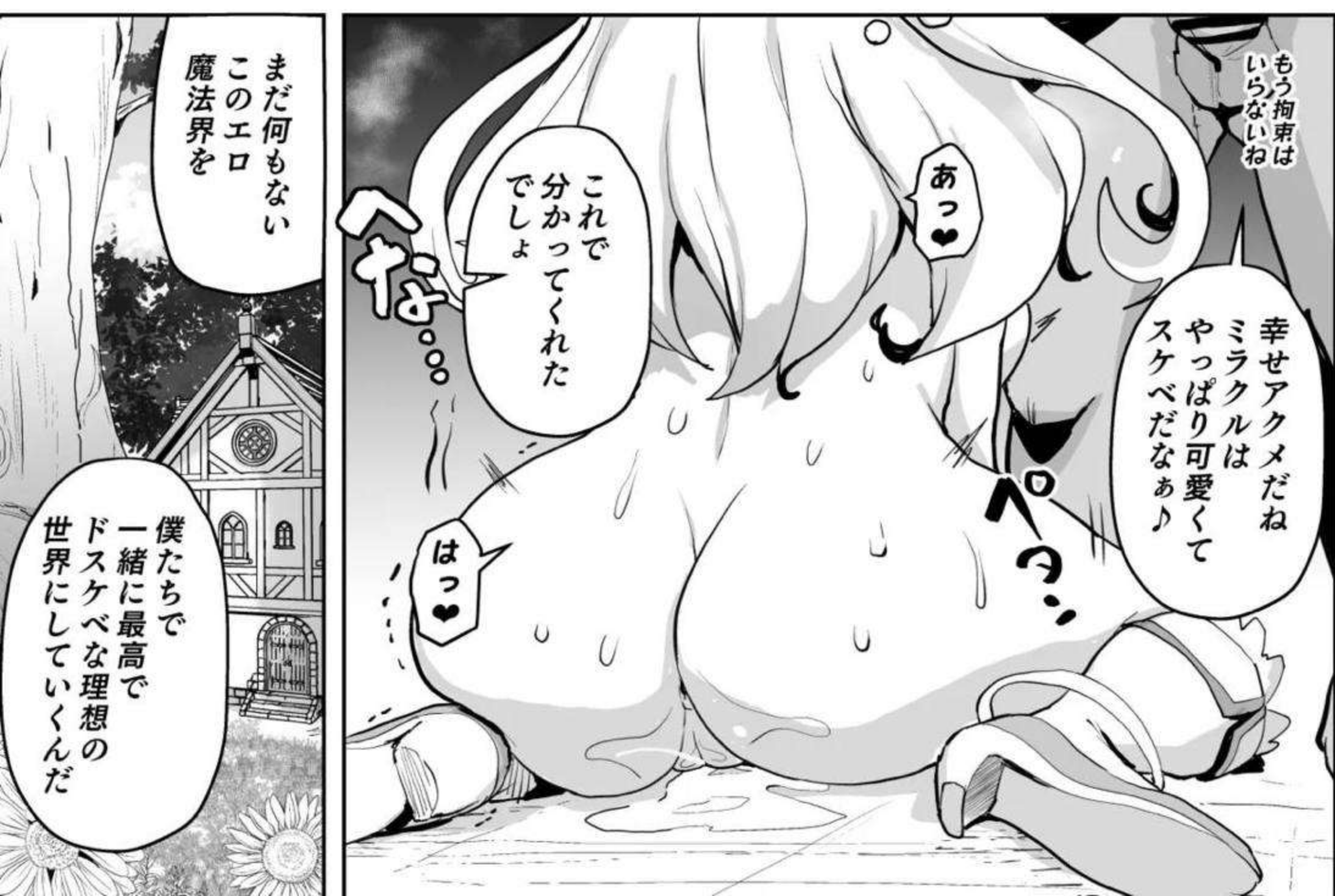
イク♡

好きだよ
みらい

ちんぽ

今好きって
いいました？

私も♡好き
愛してます♡
ご主人様♡









ごめんなさい
帰るなら
一人で帰って
ミラクル♡

ハァ♡

ハァ♡

ハァ♡

マジカル
堕ちました♡

まじ…かる

みて♡

体に溢れる
このエロ魔法の力♡
最高よ♡



あんな様♡

あそこには
私だけじゃない
ミラクルあなた
だっついて

楽しんで
下さいね♡
マジカル

みんなが
彼の元でスケベに
幸せな生活を
おくれる…♡



私も見たわ
あの幸せな
光景…♡

あれを見て
踏ん切りが
ついたの♡





エロップ
ラパパ♥

スケベ
ダイヤ♥

ミラクル
マジカル
ジュエリー

キョウ
♥

二人のドスケベ
キュアミラクル♥

二人のご奉仕
キュアマジカル♥

エロ魔法つかい
プリキュア♥





もうミラクル
はしゃい
じゃって♡

だって久しぶりの
珍田くん♡
ご主人様との
セックス♡

それもプリキュアで
みんなでなんて
最高だよ♡

ダメッ最高すぎて
すぐイク♡
イクイクイク♡

本当に良かった
これみんな
一緒ですね♡



三人がエロ魔法使い
になったおかげで
僕のパワーもあがった
みたい

分身魔法なんて
素敵すぎれふ♡
ご主人様ちんぽ
いっぱい♡

エロ魔法最高♡
ご主人ひやま
好き♡

いよいよだよ



僕たちで
このエロ魔法界を
楽園にするんだ
よろしくね♪

伝説のエロ
魔法使い
プリキュア♪

はい♡

お任せください
ご主人様♡



私はフリーの記者を
やっている
ケイ…本名だ

今追っているのは
この前空にいきなり
現れたあれ……

やっぱり
不気味だなあ

ごめんね
急に……

そして
再び頻発している
失踪事件だ

ううん
いいいいいよ
あがつて♡

私は空のあれも
誘拐に関わって
いると思うの

ええっ
まって

これって
誘拐なの？

うんこれは
誘拐事件…

女の子が
攫われる瞬間を
見たって言う人が
いて…

とっさに
撮ったのがこれ

杖を持ってる？
魔法使いかな？
それと…

うーん
ぼやけてて
良く分からない
けど…

こっちの人はたぶん
プリキュア…でも
誘拐に関わっている
とは思えないし

こいつを
追ってるんだと
思う

こんな街中で
ふ…服も
着てないんだよ

きっと誘拐の
目的も…

うう
気持ち悪いよね
なんとかしないと

…ねえ

今…
気持ち悪いって
言いました？

え？

みらい？

ガッ

偉大な
エロ魔法界の王に
向かって

駆け出しの
牝記者風情が
許せないよ
ケイ……

この短期間で
良く調べたなあ
って感心したから
もう少し聞いて
あげる気だったけど

もうブチ
犯すからっ

ゾク……

ええ♡
彼を何も知らない
無知なブタ女……

しっかり
分からせなきゃね
みらい♡

り……
り……?

じゃあケイちゃんは
任せるから
行こおばさん♪

ん♡はい♡
やっと私の番♡

エロップ
ラパパ
あのクソメスを
レイプする
ちんぽよ生えてっ

覚悟してね♡
ケイ♡



あゝ
気持ちいいゝ♡
セックス
最高だわゝ♡

こんなスケベなのに
みらいちゃん
一人だけなんて
信じられないなあ

あん♡奥あたる♡
旦那が粗チンで
インポじゃ
作りようが
ないですから♡

でも旦那さん
ちゃんと勃起してる
ように見えるけど

ああそれは…

この前ので
自分がマゾだって
気づいたみたい
なんです♡

ああそれで
その恰好w

好き♡



いー♡

あの日夫の前で
娘と二人♡

久しぶりの
本気セックス♡
私も最高に
興奮しました♡

見ててね
お父さん♡

ぐわん♡

今から
みらいの彼に
親子ダブルファック
してもらうから♡

ムっ♡

ゆさ♡



あゝ♡
お父さんそれ
勃起してる？

お母さんも♡
みらいが夢中になる
彼ピちゃんぽ
いっぱい味わっちゃ
おほ♡

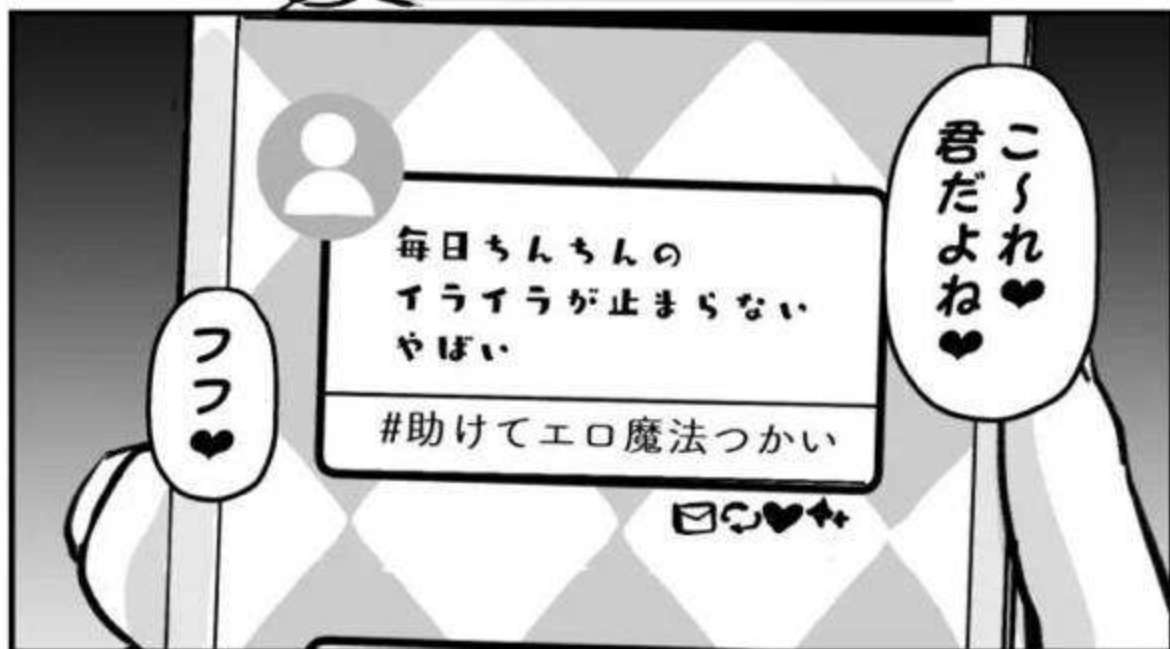
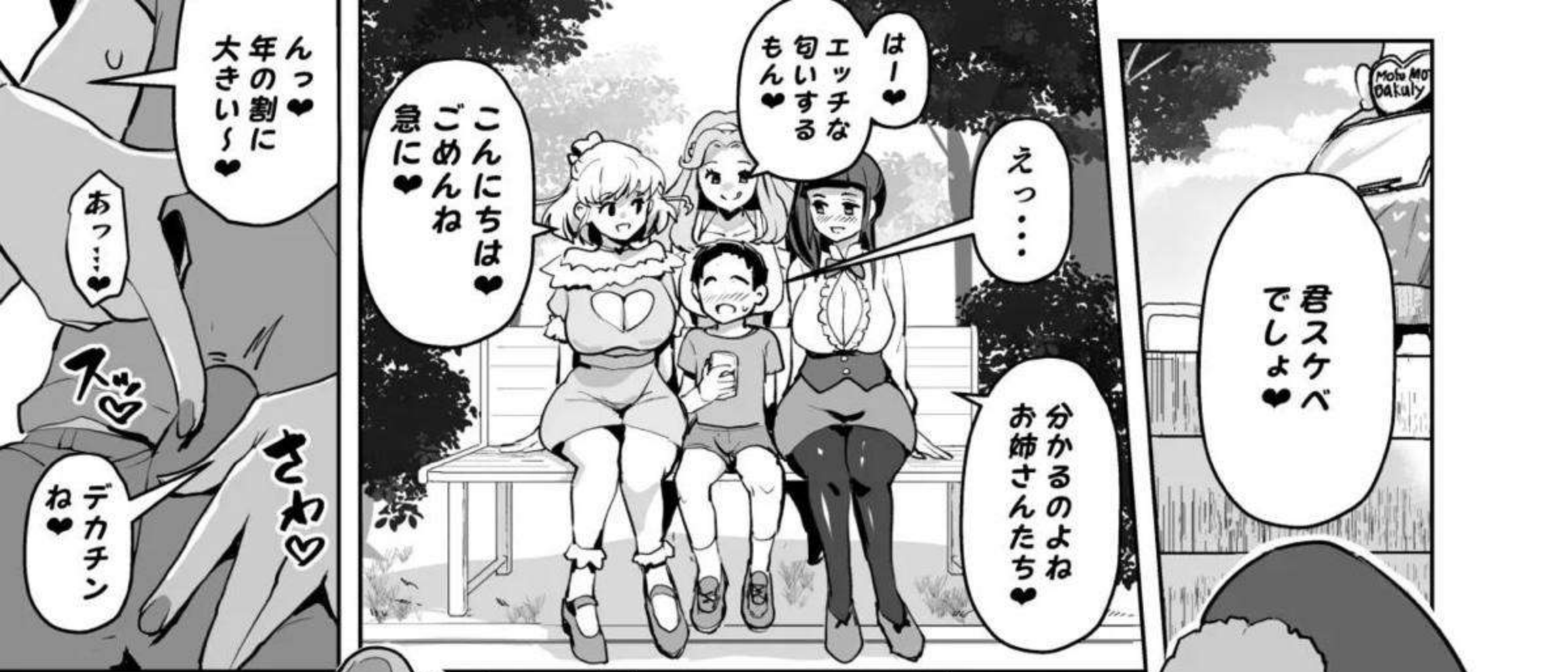
あはは
ちっさ



え…

お母さんと一緒に
なんて♡ワクワク
もんだよあ♡







気持ちいいでちゅね♡
エロ魔法に染まれば
もっつとパコパコ
できまちゅからね♡

このまま
エロ魔法奴隷に
なっちゅい
まちゅうね♡

うん♡
なりゅ♡奴隷ひなる
エロ魔法界行ふっ♡



ふー♡
牡も牝も
まだまだ奴隷が
足りませんね♡

うんもっともっと
集めなきゃ♡

これから
よろしくね♡



はい♡
これで奴隷化
完了でちゅよ♡

ようこそ
エロ魔法界へ♡



中々いいちんぽ
そのまま
エロ魔法奴隷に
変わっちゃい
なさい♡

オスガキ
ちんぽ汁
うつま♡

みんなその調子♡
後はその黒い
エロ魔法の力に
委ねるだけ♡

ドレイちゃんぽ汁
もとだへ♡

ちんぽ♡

ちんぽ♡

じまん様
イググ♡





はー♡

ちゃんと避妊魔法は
かけてあるから
そのまま
だしていいよ♡

フーッ
フーッ

ほらぐりぐり♡
私のデカケツ
まんこに
精子だせ♡

びゅーって
だしてなるの♡
奴隷♡

壮太もエロ魔法界で
ご主人様のために
働けるようになるの
嬉しいでしょ♡

はーひゃん
や…め

ぐり♡

ぐり♡

ぐり♡

うっざいなあ♡
壮太のくせに

さっさと
だせ♡

パッ♡

パッ♡

パッ♡

ほっ♡





おねんこ

私達絶対
幸せになるね♡

これから
ずっとずっと
ご主人様と…

皆さん♡
これからも見守って
いてください♡

わ

みんな
ありがとう♡

お幸せに♡

では私から
誓いのボテ腹
ドスケベウェディング
セックスを…♡

みんなと一緒
に
歩むエロエロ
魔法人生♡
ワクワク
もんだあ♡

ちよっと待って
それずるいから
フェリーチェ

じゃんけん!!
じゃんけん!
しようよ!

終わり♡

魔法使いフリフリケツキュア♪
〜ウアージン〜のまま
ケツ振りビッチになっちゃう魔法♡〜

日高久志

「キュアップ・ラパパー!」と魔法の言葉で、
世界は大混乱♪パコパコ、ハメハメ。ウキウキ、キ
ュンキュン♡
劇的大興奮〜♪ねえ〜これでいいかな〜?イドリス
様♪」

十六夜月が輝く夜。
深夜の終電が行ってしまった津成木駅は静まり返っ
ていた。

そこに綺羅びやかな魔法の光を纏った少女が一人け
たたましい笑い声を上げながら降り立つ。
桃色の長髪を靡かせながら、嬉しそうに振り返った。
ホームが禍々しく光り、何か良からぬ仕掛けが動き
出す。

「オッケ〜!オッケツ〜!〜!〜!
ぎやははっ!ことは〜!〜!やれば出来るじゃねえ
か!
さすが俺のセンターだぜえっ!」

胸元が大きく開いた服を着こなす、チャラチャラし
た筋肉質の男が下品な笑い声を上げながら、ことは
に歩み寄った。

「はあ〜♪イドリス様のお〜」

その引き締まった胸板を見るたびに……
とっても光栄で嬉しくてえ♪
あはははっ♡マン汁がビチャビチャ止まらなくなっ
ちやうのお〜♡」

「ふんっ!だろっうなあっ!
だがお前の横をわざわざ開けてやったことは忘れる
な!その…ひすいだっけ。
俺のを待たせる価値はある
女なんだろうなあ?」

月明かりがイドリスの胸元を照らす。
そこには無数の際どい格好をした天女が鮮やかな黒
色で彫られていた。
そしてちょうど心臓の上にハートを模した装飾があ
り、それを守護するようにことはそっくりの天女が
描かれている。

横と真下に空白があった。
誰かを彫り込む為に開けられているのだと一目で分
かる。
それほどイドリスのはだけた胸は天女達で埋め尽く
されているからだ。

「いひっ♡わたしの事気に入ってくれてるなら、あ
の子もきつと大好物だよ〜♪
すぐに止めようとしてくるだろうし〜。
くうんっ♪愉しみ〜♡
あの子がどんな風になっちゃうか……」

「もちろんテメエみたいにグッチャグチャにしてや
るって!
俺の得意分野だろ〜?ハハハハッ!」

シュボツ……!

イドリスはライターを取り出すと慣れた手つきで、
煙草に火を点けた。
街灯もない暗い駅の中で一際、怪しく光る。

「わたしにもちょうだい♪
イドリス様〜あ♡前みたいに……舌を灰皿代わりに
してもいいからあ、ね♡」

ことはは、ケラケラと笑いながら自分の舌を突き出
す。
イドリスは「ふんっ!」と嘲ると、その舌に煙草を
乗せてやる。

そして火を点ける。
紫の怪しい煙が、ことはの口にたちまち充満した。
指で挟んだことはは、たっぷりと肺に煙を吸い込む
と「フウウウッ♪」とウットリしながら吐き出す。
煙草の火で照らされた彼女の身体は、褐色に染まり、
普段の面影はない。
アイシャドーを厚塗りした目元も普段の彼女と正反
対だ。

何よりその格好もすごい。
大きく曝け出すように開いた胸元からは乳輪がはみ
出ている。
なによりノーブラだからか、乳首がその周りについ
た乳首ピアスと一緒に服に浮き出ていた。

お尻は完全にまる空きで、ケツ穴も女性器もかがん
だら全て見えてしまう。
痴女というかビッチギャルそのものの格好をしてい
る。

そして最も目を引くのは……彼女の開け放った胸元にも、同じ黒黒としたタトゥーが彫られていることだ。

イドリスは満足げにそのタトゥーに指を這わせた。

ことはも煙を吐きながら、イドリスの胸に彫られた自分を模した天女のタトゥーをなぞる。

ことはの胸のタトゥーはイドリスの紋章と「29」という数字が彫られたものだ。

彼女がイドリスの所有物だという証。

それを見せつけるように、ことはは誇らしげに晒しているのだ。

ピュッ……と一陣の風が吹き抜けた。

「これ以上……好き勝手になんか……!!」

「来たか！アイツがことは……」

くくくっ！お前の言う通りいい女じゃねえか！

処女だろうし、ケツ穴の締まりも申し分ねえに違いないな。

見ろよ、あのケツ」

「目を覚まして！ことはっ!!」

翡翠色の髪を靡かせた少女は、決死の表情で二人に迫る。

イドリスの紋章に改竄された「MAHOC」が導くように、魔法界への入口が大きく姿を覗かせていた……

（どうしよう……こんなこと……誰にも相談出来ないし……）

魔法ガールの姿でほうきを握りしめながら、みらいは暗く沈んでいた。

ほんの少し前。

待ち合わせをして久しぶりに会った旧友、ケイから大学の友人、野口さらの行方を尋ねられたからだ。

「彼女だけじゃない。他にも何人もの女性が姿を消しているの」

ナシマホウ界で念願の記者になっていたケイは、さらとも面識があったという。

DMでやり取りして、情報交換をしていたのだが、3日前ぐらいから音信不通なのだ。

「それに……貴方のお母さんも」

「っ!!」

みらいはケイがどこまで知っているか、思わず顔色を伺ってしまった。

事件は1週間前に起こった。

みらいの母、朝比奈今日子が家族の前でテーブルをひっくり返してこう言って失踪したのだ。

『みらいなんて生まなきゃよかったわ!!』

そ、そうしたら……私はあのひとに……いいえ!ま、まだ……』

飛び出した今日子の行方は誰にも分からない。いなくなる前に、さらも愚痴を零していた。

『あんなヤツに……』

元カレとエッチしちゃってなきゃ今頃……』

二人とも人が変わったようだった。

目がギラつき、口元にはうっすらとヨダレの跡が見えた。

ケイはいつになく真剣な表情で、みらいの手を握った。そして決意したように息を呑む。

「いなくなった女性たちの共通点は……」

一つだけ。

それは……貴方よ、みらい」

「えっ……!？」

「周りの友人や家族……それに魔法ガールとして助けた人たちも。」

全員、貴方に関係しているのが取材してわかったわ」

みらいには信じられなかった。

思いもしなかった。そんなことを。

（わたしの周りでおかしなことが起こってると思ってた……」

でも違うんだ。わたしがいるから皆が標的に……」

お母さんも……なの……」

ケイと別れた後も、みらいは落ち着かずに涙を流すしかなかった。

(リ……リコ……)

懐かしい名前が咄嗟に浮かんでくる。

会いたい。また一緒にいられたら……こんな悩みも解決してしまえるかも……

俯くみらいの上を、人影が覆った。

みらいはあまりのタイミングにパアッと笑顔を浮かべながら、顔を上げた。

「来てくれたの？……えっ……」

「ヒヤヒヤっ！つねねえな。

俺の顔見て、顔をしかめるなんて、よ」

「ギャハハハ♪しゃーないよね〜！

イドリス様イカツいしっ……！」

「イ、イドリス先生……」

そこにいたのはサングラスをかけた大男と、いつも連れているビッチギャルだった。

大学の客員教授として赴任してきたイドリスは、授業そっちのけで女性に声をかけまくる近寄りがたい男だ。

みらいは大の苦手で、遠巻きに接触しないようにしていた。

それなのにイドリスの方から、よくみらいにちょっかいをかけてくる。

しかも「朝比奈はヴァージンだろ？くくくっ……！俺

はヴァージンしか興味ねえからな！中古便器に何の価値もないのは当然だ」と下品な物言いで肩を無造作に抱いてくる。

みらいは嫌いで嫌いで仕方ない。

その身体から漂うキツイ香水の匂いを嗅いだけで気持ち悪くなる。

「みらいちゃんはさ、イドリス様のお気に入りだってことを光栄に思わなきゃじゃない？

プリプリのケツをわたしが見ても、さ。パコパコしちゃくなっちゃうエロさだから、もっと胸を張ってもいいのにい〜！

きやはははっ……！」

かがんだビッチギャルの胸元から、おっぱいが零れそうになっている。

彫られた下品なタトゥーには、イドリスの紋章と

「30」の数字。

彼女がイドリスの牝便器だという証なのだという。

ビッチギャルが顔を近づけてくる。

みらいは動揺を隠せない。

(この子……やっぱり……はーちゃんにそっくり……)

翡翠色の髪の毛や二つくりの髪型。

褐色の肌にケバケバしいメイク。

身体中に彫られたタトゥーや、露出度の高い服。

何をとっても、ことはと共通点なんてないのに、彼女と会うたびにはーちゃんを思い出してしまう。

「今夜、どうよ？」

大学の講堂借り切って、ハメパコパーティーするんだが。お前もそろそろ参加しろよ」

「お、お断りします……」

唇をかみながら、みらいはイドリスを見上げた。

直感がある。きっとお母さんやさらの失踪にはこの男が関係している。

みらいは見てしまったのだ。

お母さん……朝比奈今日子が、大事そうにしまってあったイドリスの写真を愛おしそうにピチャピチャと舐めているのを。

さらにしてもそうだ。イドリスに熱をあげてよくアプローチをしていた。

(も、もしかしたら……)

パーティーにいけば、なにかわかるかも……だけど……)

みらいはさすがに勇気が出ない。

一人でいけばイドリス達に返り討ちになるかも知れない。

たとえ魔法の力があつたとしても。

それだけ得体のしれない恐ろしさがイドリスにはあった。

「オイッ！立てよっ……！」

バカメスが偉そうにつ……！」

「ひゃっ…………！」

イドリスが怒号を浴びせた。

みらいは思わず飛び上がったしまった。

そしてイドリスの分厚い胸板に顔を埋めてしまう。

「ご、ごめん……な……さふん……んっ♪」

イドリスはみらいの形の良いお尻を鷺掴みにすると、遠慮なく揉みしだく。

「や……やめてっ……ああっ♪んくっ……♪」

イドリスの手つきはいやらしく、そして上手だ。みらいは内股になりながら、キュン♪と女心を震わせる。

「スカートの上からでも分かるぜ。

最高の揉み心地だ。きつとケツ穴の締めりも俺を満足させるだろうな。」

そうさ。オマエは俺のセンターに相應しいからな。ミラクル」

「っー?」

みらいは驚いて思わず凝視してしまった。

イドリスが何故、そのことを知っているのか?

お尻をまだ揉まれ続けているのに、飛び退くことなく、イドリスを見つめていた。

「見たいか?ほらよ。

オマエの為に空けてんだぜっ!」

「んっ……!ご、これって……」

イドリスの胸には巨大なハートマーク。

禍々しい装飾とは対照的な天女が何人もその周りに彫られている。

胸板や腹にかけて無数の天女がいる。

数え切れないほどだ。

そしてお腹の中心には、見覚えのある紋章があった。それはデウス・マスト……マザー・ラパーパの宿敵にして、世界を混沌に変える災厄の印。

「イドリス先生は……まさか……!」

身構えようとしたみらいは、また恐ろしいことに気がついた。

その答えが正しいことのように、緑色の髪をした女が嬉しそうに、天女の一人を指差して笑う。

「ぎやはははっ!これこれ♪

わたしを彫って貰ったんだあ!あの子の隣に、ね♪いいでしょ。みらいはここ。リコはその向かい側……♪」

「リコ……っー?」

見ず知らずの女の子からかけがえない親友の名前を聞いて、みらいは反射的にイドリスの腕を振り払った。

距離を取ってキッと睨み返す。

「貴方がお母さんをっ……!」

「ああ。母親がいるの気付いちやっただ?

ひやはははっ!俺ってばヴァーシシしか興味なくて

さ〜!

処女牝をケツ穴中毒にして飼うのが趣味ってなんだって!

天女のように清らかな女が、はしたないバカメスっというギャップが好きなんだよ〜!」

だけどババアは子供生んでる訳だろ?

駄目なんだよな〜、そういうのって思ってたらし……」

緑髪の女がイドリスの天女の彫り物に指でクリクリしながら、「キュアアップ・ラパーパ!処女牝に戻れっってね♪」と嘲笑う。

(ま、魔法をそんなことに使う……なんて……!)

「お母さんはどこに……!」

「自分で探せよ。教えてやる義理はねえ。ま、オマエがケツ穴拡げておねだりしたら、どうするか今日に聞いてやってもいいけど」

母親を呼び捨てにするイドリスの身体から、紫色のオーラが立ち込める。

みらいにも分かる。この力はプリキュアでないと太刀打ちできないと。

リコが……リコが来てくれれば……

みらいが伝う冷や汗を拭ったその瞬間。

イドリスは恐ろしいスピードで、みらいを捕まえていた。

「これから仕込んでやるからよっ！
ぎゃはははっ！！覚悟しな。」

母親にも元気にケツ振って、報告出来るといいなあ
っ！！」

(たった……5分……)

「MAHOC A」を手にリコは改札をくぐる。

魔法界とナシマホウ界をつなぐ鉄道の所要時間は、
二つの世界の距離が縮まるほどに短くなっていく。
デウスラストとの戦いが行われた後には、5年以上
も不通になってしまったこともあるほどだ。

それがこの短さ。

混沌が蔓延り、世界の秩序が崩壊しようとしている。
片眼鏡を持ち上げて、リコは重いため息をつく。

持ってきたトランクの中には、数日分の着替えしか
ない。

ナシマホウ界がどうなっているかは推測するしか
ないが、みらいにも危機は迫っている。

早く二人で一緒にあの悪魔を倒さないと……取り返
しがつかなくなる。

「きゃはあっ！あたいが前来た時よりナシマホウ界、
派手になってねえ？」

やべえハッパとかもめっちゃあるって聞いたけどお
……♪

ひゃひゃひゃっ！楽しみすぎるうっ♪」

リコと一緒に降り立った青髪の女が下品に高笑いし
た。

その横にいる金髪三つ編みの女も眼鏡をクィツとあ
げながら、「げへへへっ♪」と笑いを漏らす。

「オナホっ！オナホもいろんな種類があるんだって
えっ♪

ナシマホウ界は進んでるよっ♪

ケツ穴専用のもいっぱいあるって教えてくれたから
……

すぐ買いに行かなきゃ♪」

臆病で引っ込み思案だった面影はもうない。

褐色の肌にケバケバしい化粧。

身体の至る所に覗かせるタトゥー。

それは青髪の女もお揃いだ。

少し違うのは、タトゥーの中にデカデカと彫られた
胸元の数字が青髪の女、ジュンは「19」、金髪の
女、エミリーは「21」な事ぐらいだろう。

「二人とも、目的を見失わないで。

やるべきことをしてから……それから自由行動よ♪

私達はあくまで……ふふっ♪引率なんだから」

「そうそう♪リコの初めての引率旅行を手伝うのが
……わたしたちのお仕事♪楽しみだわ。ナシマホウ
界との交流。

今日子とも久しぶりに二人で……ああんっ♪」

青髪を振りつつ、胸元の開いた服がおっぱいを右へ
左へと揺らす。

ピンク色の乳輪が見え隠れするほどに下品な二人は、
リコに良く似ていた。

それもそのはずだ。彼女たちは実の姉と母。

リズとリリアも、ジュンやエミリーと同じ姿に変貌
してしまっている。

胸元の数字は「24」と「25」。

仲良く同じ日に刻んだのだと、二人で立ちオナニー
しながら報告してきたのをリコが気不味そうに思い
出す。

そしてリコは後ろをチラッと覗いた。

引率旅行らしく、魔法学校の生徒達。

教え子達が後ろにソロソロと着いてきている。

少し前まで純朴で、目をキラキラさせながら魔法を
做っていた生徒達だったが今やもうそんな面影はな
い。同じ褐色肌に身を染め、紫の煙の出る煙草をプ
カプカと吹かす……不良ばかりになってしまった。

(あの男……一人の為にこんな……)

イドリスという男が魔法学園にやってきたのは、校
長の失踪と同時にだった。

彼が関与しているかは分からない。

だがその後のやりたい放題は目に余るものがあつた。

学校のあらゆる場所で女を誘い犯した。

最初は断っていた生徒達も、いつしか絆されていっ
た。

リコが失敗したのは、そんな状況を母や姉、友人に
相談してしまったことだ。

親身になって協力してくれた彼女たちは残らず、イ
ドリスの毒牙にかかってしまった。

残る希望はみらいと一緒にプリキュアになることだけ……

デウス・マストの持つ混沌の力と……マザー・ラパーパの加護を手に入れたイドリスの力は強大すぎる。逆らうことなんて、ほとんど不可能だ。

津成木駅から出た街の様子は、いつもより賑やかだった。

閑静な住宅街が広がっていたその場所は、ネオンが煌々と輝いて、背徳的な雰囲気醸し出している。

ドクン……

リコは言いようのない不安に襲われた。

5分。たった5分で魔法界とナシマホウ界を行き来出来てしまう。

こちらの世界にも、イドリスの魔の手が及んでいた……

(も、もしかして……みらいにも……)

「ひゃううっ♪んっ……やっ……!!」

突然、お尻を撫でられてツンツンと突起を突かれた。リコは思わず可愛い悲鳴をあげてしまう。

「イドリス様から頂いたアナルバイヴ♪

もう大きいのにチャレンジしているのね♥

勉強熱心な先生だわ。感心、感心♪

愛情がこもっているわ……きつと♥」

「そうね♪まだイドリス様の極太チンポには全然、及ばないけど♪

リコもちゃんとおねだりしたらいいのに♥

そしたらこんな玩具じゃなくて……」

グリグリとリズがお尻にアナルバイヴをねじ込んでくる。

リコは立ち止まって悶える他なかった。

「あ、あの男が挿れろって……あううっんっ♪お、お姉ちゃん……だ、ダメエ……!!」

すぐにお尻の穴で感じてしまう。

イドリスに仕込まれたとはいえ、自分の身体を呪う。目の前で犯される母や姉、友達や生徒の姿を見て、自分が犯される時を想像しなかったと言えば嘘になる。

ヨダレを垂らして、アナルバイヴでケツ穴オナニーしたのも一度や二度ではない。

普段からこうしてアナルバイヴを突っ込んでいるのも、その快楽に抗えないからだ。

(は、早くう……みらいと……)

合流してえ……)

乳首がピンピンに勃って、服の生地を押し上げる。

下着の着用は許されていないからだ。

ノーブラノーパン。愛液が太ももを伝う。

「お、お待たせ……リコ……」

俯き身悶えていたリコに希望の声が届く。

この数ヶ月耐え忍んで聞きたかった……親友の声。

快楽の地獄で、唯一心の支えになっていた……大好きな人。

「やっ♪やああんっ♪う、動かないでっ♥

リコの前なのに……

あああっ♥は、激しい……♪」

「えっ……?」

思わず顔を上げたリコの前に信じられない光景があった。

仁王立ちにしたイドリスに両膝を抱えられたみらいが、愛液の垂れそぼるオマンコを露わに、お尻に怒張を突き入れられていたのだ。

ズチズチユといやらしい水音を立てながら。

「ケツ穴がいつも以上に締まったな!

はははっ!リコの前だと興奮も増すということか。こりゃあいいっ!!」

「イ、イドリス……っ!!」

リコは思わず叫んでいた。

みらいの大学生になって、たわわに実ったおっぱいが惜しげもなく揺れる。

最悪の形で再会したことだけじゃない。

すぐにでもみらいを助けたいと身体が動いた。

「キュアップ・ラパ♪薦さん、薦さん、リコを縛っちゃえ♪」

無情にも魔法の光が舞い、道路樹の薦がリコの脚に絡みつく。

リコはみらいに触れる前に、身動きが取れなくなってしまった。

「や、やっぱりーちゃんも……!」

リコは魔法を使ったビッチギャルを悔しそうに睨む。桃色の髪の少女と、緑髪の少女が寄り添い合って微笑んでいる。

「はー♡そーだよ、はーちゃんだよ♡」

イドリス様のケツ穴便器として忠誠を誓ってるんだ♡リコも一緒にケツ振りおねだり出来たらいいね♡」

「そのときはわたしもお♪」

ことはだけじゃなく……ひすいも一緒にい♡

イドリス様が誰を一番に選んでくれるか楽しみ♪」

マザー・ラパーパの力を受け継ぐことは危機が訪れた時、また違う分身が生まれると校長は推測していた。それがきつともう一人の少女なのだろう。

その少女でさえ、イドリスの餌食になってしまっている。

恐ろしい……封印したはずのデウスマストの力まで持つイドリスに勝ち目なんかない。

でもリコはまだ諦めない。

必死で手を伸ばす。

「みらいっ!手をかざして!」
モフルンっ!お願いっ!」

イドリスに犯されていても、みらいの肌は褐色に穢れていない。

タトゥーもない。キレイで健康的な白い肌をしている。

まだみらいはイドリスの与える快楽に抵抗している証拠だ。

二人が揃って、プリキュアになれば……

アレキサンドライトの力で、虹の彼方にイドリスを放逐出来る……!!

「んふうっ……♪えいっ……♡」

パシッとリコの伸ばした手にみらいが、何かボックス上のものを手渡した。

それにはツマミがついている。「強」にメモリが向けられていた。

そのボックスをリコは何なのか知っている。

声を上げる間もなく、みらいは嬉しそうにスイッチを押した。

「んひいひい♡お尻のバイヴがっ♪」

おおおっ♪しゅ、しゅこいひいっ♡♡

リコは身悶えて、はしたなく喘ぐ。

ブブブブ……!と辺り一面に響き渡るほどの機械音と共に、リコはクネクネと腰を振った。片眼鏡が落ちて、髪を振り乱す。

「わたし、リコのこと待ってたんだよ♪
んんっ……♪あはあっん♡」

イドリス様がリコと一緒にじゃないと駄目だっていうから……

私、ずっとずっと……我慢して……
んふうっ……あん♡

「そ、そんな……あうん♪」

わたし達、プリキュアが……この男と戦わなきゃ……

み、みんなが……んん♡

「ハハハハッ!俺と戦うって?

意地を張るなって何度も言ってるだろ!

もう手遅れなんだからよ。

混沌でメチャクチャになる世界を何とかする方法は一つしかねえ!

だから……ことはも、ひすいも!みらいやモフルンだって俺を受け入れたんだぜえ!」

「せ、世界を醜くしているのは貴方でしょ!」

って……モ、モフルン!?

リコは背後に迫った気配に気付いていなかった。

オレンジ色のモフモフ手袋で覆われた手が、一気にリコのお尻に入ったアナルバイヴを引き抜く。

「ひゃうううっ!?!」

んきゅっうう♪な、なんでえっ……ああっ♪」

ジュエリーのついた極太アナルバイヴ。

その素材はリンクルストーンで出来ている。

イドリスが思いついたリンクルストーンの再利用方法だ。

「チンクルストーンなんてな!」と
下品に笑っていた。

「キュアップ・ラパー♪」

ふたなりチンポくださいモフッ♥」

リコが思わず振り向いた先にいた女。
オレンジの髪を靡かせて、邪悪に微笑む女の股間からイドリスそっくりのビキビキのチンポがそそり勃つ。

「モ、モフルンなの……？」

おほおおっ♪い、いきなりいいいつ♥

は、はげしっ……んんほおっ♥」

リコのお尻に問答無用でオレンジ髪の方がふたなりチンポを突っ込む。

「はあんっ♪リコのケツ穴、しゅーいいモフっ♪
イドリス様が夢中になるのも分かるうっ♪モフウッッ♥」

グチョグチョといやらしい水音を立てながら、女は嬉しそうに腰を振る。

胸元に「85」の数字が書かれた彼女はモフルンなのだろう。

キュアモフルンとして、一緒に戦っていた時とは印象が違う。

ことは同様に、大人の身体……みらいや自分達と同じ……大学生ぐらいの体格に変化している。

「モフルンっ！

う、動かないでっ……！

ああんっ♪これじゃ……わたしまでっ……」

「いいよ、リコ♪

一緒にイドリス様にケツ穴を捧げよう♥

んんっ……♪だつてえ……私達さえ邪魔しなければ完璧なんだよ♪

イドリス様を中心にした平和な世界が完成する♥
その為にイドリス様は……リコのいる魔法学校を手に入れてくれたし、わたしの周りの女の子を皆幸せにしてくれた♪

お母さんとも仲直りしたんだよ♥

一緒にお尻フリフリしておねだりしたんだあ♪

あはあ……♪はーちゃんもモフルンもお……

もう離れ離れにならない。ずっと一緒お♥

ワクワクもんだよね♪ね、リコ♥」

「そ、そんなことお……い、言わないでええっ♥

みらいいいっ♪んんっ……♪」

リコにも分かっていた。

逆らえない力。モフルンのふたなりチンポですら気持ち良すぎる。でもイドリスに教壇で犯された時の快感は、そんなものじゃなかった。

皆が心酔するのも当たり前だ。

イドリスがいなくなってしまう方が……悲しくなってしまう。

「リコ、素直になつてえ♥

引率旅行を考えたのも……ナシマホウ界に来る口実が欲しかったからでしょう？

こ、こっちにイドリス様がいるの……知ってたからあ……♪

ああああっ♥おほおおっ……♪」

「そ……それは……」

モフルンのふたなりチンポを咥え込みながら、ケツ穴がキュンキュンする。

ナシマホウ界に行つて帰つてこないイドリスを想つて……何度も何度も屈辱的なケツ穴オナニーしてしまった。嫌で嫌で仕方ないと思っていた。

でも違う。リコは正面のみらいを見上げた。

アへ顔を浮かべて、幸せそうに喘ぐみらいを。

それはそうだ。だつて……

(イドリス様のオチンポ様を……ケツ穴にぶち込んで頂いてるんだから……当然よっ♥)

「キュアアップ・ラパパ！

邪魔な服は飛び散っちゃえっ！」

ことはが魔法でリコの着ている服を消し飛ばす。白く美しいリコの裸体が露わになった。

モフルンは繋がったまま、イドリスと同じようにリコを持ち上げる。

そしてみらいとリコを向かい合わせた。

「ほら、リコとも仲直り♪

手をつなごう……♥永遠にイドリス様のセンター牝妻になる♥」

イドリスに突き上げられて、おっぱいを揺らすみらいを、美しいとさえ思える。

リコは顔を赤らめながら、前に差し出された両手に指を絡めた。

「う、うんっ♪みらいと一緒になら……」

きやうんんっ♥イドリス様の……
牝妻にいいっ♥」

「ひやはははっ！よく言ったぜっ……！
リコを焦らした甲斐があったなっ……！
今日からお前は俺の……牝妻として生きろっ……！
ハハハハッ……！」

耳障りなイドリスの高笑いにも、リコはもう嫌悪感を抱かない。
むしろ光栄とさえ思えた。

（あっ、ああっ♪イドリス様を受け入れることが……

……
こんなに幸せなんてえ……♪
それなら最初から素直になっていれば……
んんっ♥）

「おめでとう、二人とも♪

お母さんは嬉しいわ♥牝妻になれるのはみらいとリコだけなんだから♥

私達、便器奴隷とは違う……
特別なハメ穴なのよ♪」

「そうね、素敵よ♥

でもイドリス様のモノなら、キチンとしないといけないことがあるでしょう？

イドリス様に促されるまでもないわ。
今がその時よ……♪」

今日子とリリアの母親二人が娘が犯されているのをウツトリと見ている。
リズやシュン、エミリーも同様だ。

みらいのアへ顔がさらにパァッと明るくなる。

「じゃ、じゃありコ……♪

二人で一緒に……お互いにかけてあおう♥
どうすればいいか……おおおう♥わかってるよね♪」

「う、うんっ♥

あふうっ♪め、メスイキしながら唱えよお♥
わたし、もお……い、イクよっ♪」

二人の仲睦まじい様子にイドリスもモフルンもピストンのペースを早めていく。

両手を繋ぎ合っているリコとみらいの成長したおっぱいが、お互いに絡まり合う。

「キュアップ・ラパパあ♥

十六夜リコはあ……イドリス様の牝妻として相應しい身体になあれ♥

永遠に消えないタトゥーを刻んでえ……♪
やああんっ♪イクうううっ……

おほおおっ♥」

「キュアップ・ラパパっ♥

朝比奈みらいの姿をイドリス様の為のものに変えるのおおっ♥

わたしと一緒にお揃いのお……牝妻姿にいいっ♥おふううっ♥い、イクうううっ♥」

ドピュルウウ……！ドピュドピュッ……！！

二人のメスイキに合わせて、イドリスとモフルンもケツ穴に盛大に射精する。
みらいとリコはケツアクメをキメながら、魔法の光

に包まれていった。

「んほおおっ♪

きたあああ……♥最高おおっ……♥」

「すごおおっ♪

こんなのおお知らないのおおっ……♥」

ビチャビチャと精液をケツから垂れ流す二人の身体が褐色に染まっていく。

そして胸に大きなイドリスのマーク。

みらいは「85」、リコは「86」の数字もしっかりと刻まれた。

その様子を見ながら、みらいとリコはまたキュッとお互いの手を握り返す。

「二人の奇跡っ♥」

「ふだりの魔法っ♥」

見つめ合った二人は気持ちを確かめあった後、キスを交わす。

誰にはばかることもない、舌を絡めたディープキス。

そしてケツ穴をまた締め付ける。

「ケツ振りおねだりキメたいか？みらい、リコ」

イドリスが意地悪そうに、クックツと笑う。

二人は同じ……はーちゃんやひーちゃんのまったく一緒の邪悪な笑顔を浮かべながら、「はい、イドリス様♥」と従順に阿るのだった……



「くくっ！」

俺達のことを皆が見ているぜえ！
二人ともどんな気分だ？」

「私はフリーの記者をしていたケイです。
魔法学校を卒業して、念願の記者になりました。

でも今はイドリス様専属の

記録係をしています♥

ケツ穴にハメて頂いたのはもう1ヶ月も前になりましたが、お気に入りの二人と一緒にいるので仕方ありません。

気まぐれにおぼれに預かれれば……んっ♪

それだけでケイは幸せです♥」

大学の校内を我が物顔で歩くイドリスの後ろ姿を見送りながら、ケイはせつなくお尻を振る。

アナルバイヴをスポスポと出し入れしながら、切なげに唇を噛んだ。

「あ、イドリス様♪

今日もたくましいお体が……見ただけで元気になる♥」

「かなったら♪

ちゃんと魔法の研修を終わらせないと、イドリス様のお役には立てないよ♥」

みらいの親友、かなとまゆみもお互いのアナルバイヴを押し込みながら、はしゃいでいた。

魔法使い否定派だったまゆみも、すっかりイドリスがもたらしたエロ魔法の虜になっている。

イドリスが両端にいるみらいとリコのお尻を、豪快に鷲掴みにする。

二人は抵抗することなく、お尻をさらにその手に押し付けた。

「今、皆の前で見せつけケツハメするぞ、って言いました？」

あはあんっ♪それなら……大歓迎です♥

リコとすぐにでもおねだりケツ振り

しちゃいます♥」

「んんっ♪計算通りです♥

イドリス様の隣にいても、皆劣情を催すのに。

見せつけるようにケツを振っていれば……♪

もう我慢なんて出来ないんだからあ……♥」

妖艶に笑う二人をイドリスも、「ギャハハハっ……！

やっちまうか……！」と満足げに見比べる。

ケツ穴がキュン♪とイドリスのイチモツを求めてすぼむのが手に伝わってくる。

それどころか二人はイドリスのスポンを押し上げる

チンポに、仲良く指で輪っかを作ってさすっていた。

デウスラストとマザー・ラパーパの相反する力は、

イドリスによって統合された。

魔法界もナシマホウ界も混じり合い、イドリスの為の世界になってしまった。

だがみらいもリコも幸せそうに微笑む。

それはイドリスの胸の中でもた。

彼の身体に彫られた無数の天女。彼のケツ穴処女奴隷である証。

その一番目立つところにあるハートマーク。

そして……その両脇に一際目立つドレス姿の牝妻達

が描かれていた。

ミラクルとマジカル。

プリキュアの姿で愛を捧げるみらいとリコが。

「最高にいい気分だぜ」

胸元をはだけさせ、二人のタトゥーを見せつけるように歩くイドリスを、みらいとリコは誇らしげに思う。

そして自分たちの胸の数字も、同じく見せつけて乳輪がはみ出ようと構いなしにしている。

イドリスが校門の前で顎をしゃくった。

二人は頷き合うと、大勢の奴隷達が見守るなか、壁に手をつきお尻を突き出した。

「イドリス様お気に入りのミラクルケツマンコ♪

いつでもどこでも準備万端で、濡れ濡れです♥

ですから……

みらいからケツハメお願いしますっ♥」

「イドリス様だけが使えるマジカルケツマンコっ♥

褒めて頂いた締りをキープしつつ、同じく濡れ

濡れです♪

わたしから……先にお願ひしますっ♥

みらいよりわたしいいっ♥」

普段は仲がいいのにおねだりする時は、何故か先を争う二人。

お尻をぶつけ合いながら、媚びへつらうみらいとリコが、振り返ってイドリスを見つめる。

イドリスは「どちらにしようかな？」と指先を動かしながら、ノーパンで露わになったケツ穴を見比べる。

そんな彼の指には、大きな石の着いた指輪があった。

それはみらいとリコの服従の証。

二人の絆が紡いだ……在りし日のダイヤのリンクルストーンの成れの果て。

「よしっ！決めたぞー！」

ダイヤの輝きが指し示すケツ穴にイドリスは向かう。

二人はワクワクしながら、イドリスのイチモツを待ちわびるのだった……

おわり

あとがき

描こう描こうと思っていた、まほプリ本！
2期が放送されたのもあり今回描かせて頂きました！！
成長したみらいやリコ達をがつつり描けて満足！！

内容どうするかなとかなり迷いましたが、楽しんで
頂けたらいいなと思うばかりです！！
(デパプリ本でやったような喧嘩シチュ、またかよ
と思われそうですが…)

なににせよやりたいことはやれたかなと！

ただ漫画的な反省点は本当に多々ありまくりなので
頑張っていきたい…。

後はキミプリも描きたいなとか！！

そして改めて、暑い中お手にとって頂き
本当にありがとうございました！！

これからも頑張って活動していきますので
よろしくお願い致します！

さなつき

奥付け

- 発行・著者 さなつき
- サークル アヘアジフ
- Email neko998-aheaji@yahoo.co.jp
- Pixiv 41042507
- Twitter @sanatuki0510
- 印刷 ねこのしっぽ様
- 発行 2025/8/17 コミックマーケット106

日高さん!!
今回も本当にエッチな
寄稿文感謝です!
ありがたや!!

魔法使いプリプリケツキューア♪

～ヴァージンのままケツ振りビッチになっちゃう魔法♥～：

- 著者 日高久志
- pixiv <http://pixiv.net/users/4853918>
- ノクターン <http://xmypage.syosetu.com/x8371q/>

**制作
アヘアジフ**

**この作品は
二次創作であり
原作とは一切関係ありません**

複製を禁止する